

# 獄中の豪傑たち

— 洪命憲と李光洙が東京で共有した世界 —

県立新潟女子短期大学 波田野 節子

1. 出会い
2. 交友
3. 東京留学生たち
4. 李光洙の「日記」
5. 「獄中豪傑」
6. 洪命憲とパイロン
7. 別れ

朝鮮近代文学の嚆矢とされる長編『無情』を書いた李光洙と、歴史小説『林巨正』の作者洪命憲は、日韓併合の直前に東京で学生生活を送り、同じころに文学に目覚めて交友した。李光洙はこの時期に創作活動を開始し、洪命憲は20年後に『林巨正』を書き始めることになる。李光洙が1909年末に書いた詩「獄中豪傑」には、このころ2人が共有していた詩的世界—パイロンの反逆精神があふれている。この詩は、祖国の独立の危機を前に逼迫していた東京の留学生たちの心情を、李光洙がすぐれた詩的感性で吸収し、形象化したものであった。

## 1. 出会い<sup>1)</sup>

李光洙(1892～1950)は1905(明治38)年に東京に留学した。平安北道定州の貧家に生まれて満10歳のとき孤児になった彼は、東学教人に拾われたのが機縁となって東学の留学生に選ばれたのである。日露戦争終結前の夏で、李光洙は13歳だった。当時、東学3代教主孫秉熙は朝鮮の開化を主張する「三戦論」を唱え、自らも東京に滞在しながら教徒の子弟を東京に留学させていた。日本に来た李光洙はまず塾に通い、翌

1906年の春、神田区三崎町にある大成中学校に入学する。このころ洪命憲(1888～1968)が彼と同じ下宿にやって来た。忠清北道槐山の名門両班の長男である洪命憲は、1904年の韓国皇室派遣留学生に応募しようとして家の反対で断念、その後父親が祖父を説得してくれて私費留学生として日本に来たのだった。日本は1905年に保護条約によって大韓帝国から外交権を剥奪し、その後も実質的な支配を強めていた。政府の高官であった父親は、将来のことを考えて息子を日本に留学させたのであろう。東京に着いた洪命憲は投宿した新橋の旅館の費用がかさむため本郷区元町の旅館兼下宿に移ったが、そこにいたのが李光洙と文一平(1888～1939)だった。そろそろホームシックにかかっていた洪命憲は、同国人がいることを下女に聞いて涙が出るほどうれしかったと述懐している。李光洙の記憶によれば、洪命憲に最初に出会ったのは銭湯<sup>2)</sup>だったという。平安北道の貧家出身の孤児と、曾祖父が吏曹判書、祖父が参判をつとめた名門士大夫の長男とが友人になることなど、1900年代初めの大韓帝国ではありえなかったことだろう。地位や家柄とは無関係な交友が、異郷の東京、それも互いが裸の銭湯で始まったことは、この時代を象徴するような出来事であった。

洪命憲は、まず東洋商業学校の予科2年生2学期に編入学した。そして学業のかたわら受験準備をして翌1907(明治40)年の春に大成中学校3年生の編入試験に優秀な成績で合格する。このとき本来なら2年生になるはずだった李光洙は、学費中断のためにすでに退学していた。東京にいた孫秉熙は親日傾向を強める国内の動きを警戒し、帰国して李容九らを教団から追放したが、このとき起きた内紛のために7月から留学生たちへの学費が中断したのである。しばらく異国で生活苦と闘っていた留学生たちは、力尽きてついに代表者21名が全員断指して抗議するという挙<sup>3)</sup>に出た。この衝撃的な事件は本国で同情をよび、勅令により大韓政府が学費給付することになって事態は決着を見た。年が若かったせいであろう、李光洙はこの挙には加わらず、帰国して事態の收拾を待ちながら故郷で正月を過ごしている。

学費が中断した李光洙が同じ下宿にいつづけるのは難しかったはずだから、1906年の最初の交友期間はさほど長くなく、その関係も異国で出会った同国人同士の域を出なかったのではないかと推測される。彼らの交友が深まるのは、このあと別々の学校で学びながら偶然同じ時期に文学を愛するようになってからのことだ。

## 2. 交友

1907(明治40)年、官費を受けて再び東京に来た李光洙は、大成中学校に復学せず、9月の2学期から明治学院普通部の3年生に編入学した。1年飛び級したわけである。官費の給付が3年の期限つきであった事情にもよるの<sup>4)</sup>だろうが、李光洙が中学校で勉強したのは1年生の1学期だけであるから、その優秀さがうかがわれる。これで15歳の李光洙と19歳の洪命憲は同じ中学3年生になった。そして2人はこの学年の終わるところから文学に傾倒するようになる。洪命憲は2学期を終えた冬休みに本屋で買った3冊(正宗白鳥「何処へ」徳富蘆花「巡礼紀行」真山青果「青果集」)をきっかけにして小説を耽読するようになり、李光洙もそのころ読んだ「火の柱」以来、木下尚江の作品に夢中になった。1908年4月、洪命憲と李光洙が4年生に進級したとき、それまで大成中学校で洪命憲と同級生だった山崎俊夫という少年が、李光洙のクラスに編入してきた。山崎はのちに慶応大学で永井荷風に師事して耽美的な作品を書いた人物だが、<sup>5)</sup>このころ敬虔なキリスト教少年で、大成中学校では洪命憲に、明治学院では李光洙にトルストイの「我宗教」を読むように勧めた。西洋人は自分たちの信仰の対象を偉人として東洋人に押し付け、それを日本人は西洋崇拜の念から受け入れているのだと考えてキリスト教に反感をいただいていた洪命憲は、さまざまな反キリスト教理論を持ち出して論争に持ち込み、<sup>6)</sup>ぎゃくに木下尚江に夢中だった李光洙は、今度はトルストイを崇拜するようになって山崎との親交を深めた。

故郷で孤児として惨めな半放浪生活を送った李光洙は、東学に出会って「世のために自分を捧げる」ことで自らの幼い自尊心を守るという

経験をもっていた。明治学院に入っちはじめて聖書を読んで感動した彼は、教師たちの世俗的な言動に失望し、木下尚江の描く社会正義に身命をなげうつ主人公の生き方や、信仰とは実行することだというトルストイのキリスト観に共鳴した。このころ李光洙は理想を追い求める純粋な少年だったようである。一方、4歳年長の洪命憲は名門両班の長男として多くの眷属に囲まれて育ち、すでに妻子もあった。祖父や父親を通して上層両班としての身の処し方も習得していたことであろう。彼には研究者的な気質があり、帰国後は官職について出世することを目的に留学してくる者がほとんどだったこの時期に、腰を据えて新学問を学ぼうと決心していた。あらゆる領域の書物をつぎつぎに読破していた彼は、文学も手さぐりで読みすすんでいった。朝鮮人留学生には文学に興味を持つものなど他にいない中で、洪命憲と李光洙は急速に近づいていったと思われる。実家からの豊富な仕送りで本を買う金に困らなかった洪命憲は、関心のおもむくままに文学書を買えばさっては李光洙にも読ませた。李光洙は中学時代に読んだ書物に関して何度か回想しているが、それらを整理すると、このころ彼が読んだものはほとんど洪命憲の影響下にあったとみなしてよいようである。1908(明治41)年と09(同42)年の2年間、彼らは文学を通じて親密につきあった。

### 3. 東京留学生たち

洪命憲と李光洙が東京に留学していたのは、日本の朝鮮植民地化が最終段階を迎えていた時期である。日露戦争が終了すると日本は大韓帝国に保護条約を強要して外交権を奪い、つづいて着々と実権を掌握していった。朝鮮の独立を保全するという日露戦争中の日本の言明を信じていた李光洙は、保護条約のニュースを聞いて仲間とともに日本の裏切りに憤激した<sup>7)</sup>という。1907年にはハーフ密使事件がおきて高宗が退位した。精神的に問題があると噂されていた純宗が即位したことに李光洙は、「亡国の運命がますます切迫した<sup>8)</sup>こと」を感じた。軍隊は解散され、日本は次官制度によって権力機構の末端まで掌握して、実質的な朝鮮

支配を完成しつつあった。それまで地方ごとに団体を作って会誌を出し、一本化の動きがあっても地域感情に阻害されて成功にいたらなかった東京留学生たちは、日本のこうした動きに危機感を強め、ついに大同団結して、1909年1月、大韓興学会を設立した。<sup>9)</sup>3月に発行された会誌『大韓興学報』創刊号に洪命憲は「一塊熱血」という論説文をよせ、朝鮮王朝時代の党争を引き合いに出しながら、現代の朝鮮半島で猛威を振るう「地方熱」の弊害は国を危うくしていると警告して「団合」を呼びかけている。これは洪命憲の印刷化された最初の文章である。

この年7月に日本政府は朝鮮の植民地化を閣議決定し、3ヵ月後におきた安重根の伊藤博文射殺事件は併合への流れを一気に加速した。日本の新聞は韓国に対して敵対的な論調をとり、一進会は合邦声明書を提出した。この事件で日本人級友の態度がかわり朝鮮人学生たちを蔑視憎悪するようになったと回想して、李光洙は「時局が急転直下してもっと大きな不幸が目前に来ているような気がした」と書いて<sup>10)</sup>いる。1909年末から日韓併合にいたる時期、東京にいる留学生たちは精神的に追いつめられていった。このころの「大韓興学報」に安重根事件への言及がまったく見られないのは、検閲のためであろう。だが1909年12月に発行された「大韓興学報」第8号の編集室餘言は、あきらかにこの事件を意識して書かれたものである。筆者は「三投生」というペンネームを使っている。ちぢに乱れる心を書きとめることができず筆を投げ出した筆者が気を取り直して机の上にある本を読むと、それは19世紀の歴史家ロード・マッコリー<sup>11)</sup>の著作で、初代ベンガル総督ヘイスティング<sup>12)</sup>がインドで行った非人道的な暴政を弾劾した法廷の状況を描いたものだった。弁士パークの行う素晴らしい弾劾演説に筆者は胸をとどろかすが、結局ヘイスティングは無罪を勝ち取る。ここまで読んだ筆者は、「弱いものには罪があり、強い物には罪がないからだ」と<sup>13)</sup>慨嘆して本を投げ出してしまふ。そのとき新聞が届く。そこには最近英国の領事を殺害して「亡国民族の一時快感を刺激した」<sup>14)</sup>インド人青年が死刑になったという記事とともに、彼が祖国への思いを伝えるために残した論文が載っていた。

これを読んで憤激のあまり新聞を投げ出した筆者は、なぜインドのことがこれほど気にかかるのだろうと自問し、それは弱者に罪があり強者に罪がないことが、今も昔も同じからだという結論に達して物思いに沈む。インド人テロリストへの共感と哀悼の意に安重根への思いを託していることが明らかな文章だ。筆と、本と、新聞と、三度つづけて投げ出したことに由来する「三投生」という筆名には、すべてを投げ出したくなるような閉塞状況に対する嘆きと憤りがこめられている。やり場のない怒りと、こんなときに学問をしてどうなるのかという焦燥感から、この時期の留学生たちは勉学意欲を喪失していった。

#### 4. 李光洙の「日記」

このころ李光洙がつけていた「日記」にも、「僕は勉強がいやになった。やめてしまおうか。ええい、5ヶ月だけの辛抱だ<sup>15)</sup>」という記述が見える。この「日記」はのちに「16年前に東京の某中学に留学していた18歳少年の告白」という副題を付けて発表されたもので、安重根事件<sup>16)</sup>の12日後の1909年11月7日(日)から翌年1月15日(土)までの2ヶ月あまり、すなわち明治学院中学5年生2学期の終わりから3学期初めまで、李光洙が「心の中におきた」<sup>17)</sup>「事件」等を書きつづったものである。自然描写のあまりの巧みさや、不自然に挿入された人物紹介などから見て、発表時に本人の手がかなり入っていることが推測されるが、日記に記された曜日や社会事件は正確であり、当時の日記がもとになっていることは間違いのないと思われる。この時期に李光洙が読んだ本や見た劇、友人たちとの交友形態などがうかがわれる興味深い資料である。

中学4年生のときトルストイを信奉していた李光洙は、このころバイロンに心を占められている。バイロンを知って彼は、「暴風狂乱に雷雨まで加わり、ほとんど気も狂わんばかり」<sup>19)</sup>の葛藤を味わったという。長谷川天溪の「現実暴露の悲哀」など自然主義評論を読み、非情な現実を前にして自分の理想主義への懐疑を抱いていた李光洙は、ちょうど自我覚醒と性の目覚めを迎える時期だったこともあり、バイロンの詩がも

つ力と詩人の壮烈な生き方に衝撃をうけて、清教徒的で窮屈な人生観を一挙に崩壊させた。バイロンを李光洙に読ませたのはもちろん洪命熹である。既成の道德観念に束縛されず、自分の姿と欲望をありのままに見つめて受け入れるという、いわば文学の原点を獲得して、李光洙はこのとき牢獄から明るい天地に出たような解放感をあじわった。彼は「日記」に自分の性欲について書くことも躊躇していない。

「昨夜はH兄にバイロンの伝記を読んで聞かせ、遅くなって床に入ったが、午前1時頃に寒気で目覚めるところとなり、性欲で激烈に苦労した<sup>20)</sup>」

祖国の独立への危機感にバイロンの衝撃がかさなり、この時期の李光洙はきわめて特殊な精神状態にあった。周囲におきる事件は彼の「心の中に起きた事件」となり、独特な色あいを帯びて記述されている。11月8日(月曜)、「不如帰」観劇の帰りに青山墓地で名誉の戦死を遂げた大尉の家族を見た李光洙は、「彼が弾丸に当たって鮮血を流しながら呻吟する瞬間」を想像した。同21日(日曜)、二本榎町で起きた家族5人惨殺事件のニュースを聞いて、「即死してさえいれば彼らは幸福だ。一瞬間で人生のすべての苦悩を忘れたのだから。」と書きつけ<sup>21)</sup>、12月14日(火曜)には近所で起きた火事を見ながら、「ああ、快い。シベリアの大森林に火を放ったらどれほどいいだろう。」と叫んでローマの暴君ネロとバイロンのことを考えている<sup>22)</sup>。

李光洙の創作活動が始まったのは、このように昂揚した精神状態においてであった。11月18日に日本語による処女作「愛か」を脱稿し、24日には「虎」を完成させている。「虎」を書いた10日後の12月3日に「『獄中豪傑』という詩を『大韓興学报』に送る」という記述があり、また「獄中豪傑」の主人公が虎であることから見て、この「虎」が翌年1月に『大韓興学报』第9号に掲載された詩「獄中豪傑」に該当すると見られる。「獄中豪傑」はバイロンの詩精神である反逆の気概にあふれた作品である。

## 5. 「獄中豪傑」

「獄中豪傑」とは檻に閉じこめられた虎である。山野を自由に駆け巡り、敵と出会えば堂々と闘い、勝てばそれで腹を満たし負ければ恨むことなく殺されるのが掟である自然界、そこで三千獣族の王者であった虎が人間に捕われて檻に閉じ込められる。過去の自由な生活を回想して憤怒にふるえる虎は、ステッキで自分に触れようとした無礼な見物客の頭を稲妻のように前足の一撃で打ち砕き、王者の誇りを見せる。作者は、自分より体の小さな人間に反抗しようともせず奴隷となっている牛馬は、この虎に比べれば生きながら命がないのも同様だと罵倒する。だが虎は檻の中で鉄の鎖に縛られ、人の手から死肉を与えられて生き延びるうちに気力と威厳を失っていった。いまや農家の犬の嘲りすら受ける存在になってしまった虎に向かって作者は、奴隷になるな、抵抗して死ねと呼びかける。鉄鎖を牙で噛みつづけ、檻を四肢で壊しつづけ、牙も爪も擦り切れて抵抗の力もなくなったなら、最後は心臓から血を噴いて死ねと作者は叫ぶ。

檻に閉じ込められたうえ鉄鎖で束縛された虎という凄惨なイメージは、亡国の危機に瀕してなすすべもない大韓帝国の象徴であろう。詩のあとに「嘯印生評曰 畫出眞境讀不覺長」とある。嘯印とは、当時明治大学の学生であった素昂・趙鏞殷(1887～1958)の筆名である。李光洙より5歳年長で、皇室派遣留学生として1914年に来日した趙鏞殷は、このころ『大韓興学報』の主筆として筆をふるっていた<sup>23)</sup>。学生は国の前途を左右する存在であり「奴隷心に同化した学生の国は滅亡の兆しがある<sup>24)</sup>」と述べた「学生論」や、民族を「奴隷犬馬の性」にした「慕古事大<sup>25)</sup>」を「旧韓」の四大罪悪の一つにあげた「己酉の歳の終に旧韓を送る」など、趙鏞殷は『大韓興学報』に書いた論説の中で奴隷の心性からの脱却をさかんに主張している。奴隷に墮すよりむしろ抵抗して死ねと叫ぶ李光洙の「獄中豪傑」は、そのような主張を詩的な形で代弁するものとして彼の琴線に触れたのだろう。というより、この詩自体が、当時東京で閉



塞状況にあった留学生たちの心情を、詩人の感性をもつ李光洙が吸収して表出したものであったとみなすべきではないか。17歳の李光洙がいかに感受性が強く影響を受けやすいタイプであったかは、洪命憲にバイロンを吹き込まれて気も狂わんばかりに心を乱されたことでも想像がつく。そんな彼が、自分の周囲で飛びかう「奴隷」という観念に触発されてこの詩を書き上げたのではないかと思われるのだ。バイロンから受けた<sup>26)</sup>衝撃でそれまで自分を束縛していた考えや慣習から自由になり、まるで獄から出たような解放感を味わっていた李光洙の詩的な感性が、祖国の危機を前にした焦燥と憤りで極限にまで高まっていた東京留学生たちの閉塞感を自分の内部に取り込んで形象化させたのがこの詩であったと思う。抵抗詩「獄中豪傑」の世界は、その意味で趙鏞殷や洪命憲たちと共有された世界であったのだ。

## 6. 洪命憲とバイロン

李光洙にバイロンを読ませた洪命憲は、バイロンの詩「カイン篇」からとった「假人」を号にするほど、このころバイロンに傾倒していた。だが彼は詩人氣質の李光洙とは違って動揺を表面化させることはなかったようだ。4歳年下の少年がバイロンの衝撃で創作行為を開始し詩を生み出すのを見守りながら、自分の中で爆発しようとするものを静かな燃焼<sup>27)</sup>に変えていたのではないかと想像される。19世紀のイギリス詩人バイロンの詩は明治20年代にはじめて日本語に翻訳され、30年代には「バイロン熱」と称されるほど盛んに読まれたが、日露戦争後は急速に人気を失っていった。洪命憲がバイロンを知ったのは明治41,2年のころである。偶然にも、1902(明治35)年から日本に留学中だった中国の魯迅(1881～1936)もバイロンに触発されて、1908(明治41)年に東京で評論「摩羅詩力説」を著している<sup>28)</sup>。のちに中国と朝鮮で作家になった2人が、ともにこの時期バイロンに惹かれたのは何故だったのだろうか。

日本でのバイロン人気には、木村鷹太郎(1870～1931)の翻訳・紹介活動が大きく寄与している。日本主義者であった木村がバイロンを称揚

した根底には、現在は列強の民族膨張が衝突する帝国主義の時代であるという時代認識と、その中で力のないものは淘汰されて植民地に転落するという危機意識があった。木村はバイロンが詩の中で謳う神に反逆する悪魔の「強大な意志」を、力で劣る日本が西欧列強に対抗していくために必要な気構えと見なし、三国干渉で弱小国の悲哀を痛感していた日本国民に壮大な「元気」を吹きこむべく精力的にバイロンの翻訳・紹介を行ったのである。とくに明治35年に出た彼の『バイロン文界之大魔王』は、バイロンの生涯と作品を木村が独特な解釈をほどこして紹介したもので、一部には「木村のバイロン観」でしかないと評されたが、当時おおいに読まれた。洪命憲が李光洙に読ませて心に炎を燃え上がらせたのも、魯迅が「摩羅詩力説」の材源にしたのも、この書であった。

「摩羅詩力説」で魯迅は、奔放で背徳的な作風と生き方から悪魔(=摩羅)派詩人と呼ばれたバイロンの系譜につらなる、シェリー、プーシキン、レールモントフその他の詩人たちを顕彰している。人生の意義を「反抗と行動」に求め、大衆に媚びず旧習に追随せず生きたため社会的には不遇であったそれらの詩人たちを、魯迅は「雄たけびを挙げて、その国民に生気を吹きこんで立ち<sup>29)</sup>上がらせ」た「精神界の戦士<sup>30)</sup>」と呼んで、中国にそのような詩人のいないことを悲しむ。自民族の衰退をくい止めるために民族の「精神的改造」が必要だと痛感していた魯迅は、日本主義者木村鷹太郎の意図を別の場所からしっかりと受けとめたのである。

それでは洪命憲はバイロンをどのような形で受け入れたのだろうか。洪命憲がバイロンに傾倒していたことは、李光洙の回想や、假人という号にまつわる洪命憲の談話などから伝わっているが、彼自身がバイロンについて書いたものは存在していない。しかしながら、李光洙が洪命憲の影響下で書いた詩「獄中豪傑」や、日本と列強に侵食される中国を祖国とする魯迅のバイロン受容のあり方、そして洪命憲が実に20年後に書き始めた長編『林巨正』の主人公の人間像から、我々は洪命憲がバイロンをどのように受け入れたのかを推測することができる。束縛された虎に向かって奴隷化するより抵抗して死ねと叫ぶ「獄中豪傑」、反抗の行

き方をつらぬいた詩人たちの不羈の魂を顕彰した「摩羅詩力説」、白丁に生まれ火賊となって世間に復讐する「林巨正」、それらに共通するのは反逆・抵抗・復讐という行動である。パイロンの悪魔は神への反逆と復讐という形で自己の自由を守り、カインは悪魔にも神にも服従しないことで自己の尊厳を守った。そのカインの名を号した洪命憲は、魯迅と同様、自らの尊厳のために闘うことを忘れていた民族の心の起爆剤としてパイロンを受容したのだと考えられる。

## 7. 別れ

1910年初、洪命憲は「卒業などして何になる」と嘯いて中学卒業を目前に帰国した。一方、故郷に扶養すべき祖父と妹のいる李光洙はそうもいかなかったのだろう。卒業を待って帰国する。故郷に向かう途中、彼はソウル北村の大邸宅に住む洪命憲を訪ねたが、民族教育に身をささげるのだという彼の悲壮な決心に洪命憲はさほど関心を示してくれなかった。このころから2人は違った道を歩き始めることになる。五山学校で自己犠牲的な教員生活を送るうちに李光洙は東京での生活を「四畳半の空中楼阁」だったと反省するにいたり、紆余曲折を経ながらではあるが、しだいに「反抗と行動」の論理から遠ざかっていく。李光洙はのちに短編『無明』で獄に閉じ込められた人々の姿を描くが、そこに見られるのは仏教的な諦念の世界である。人世が苦界で火宅である以上、「娑婆」と「獄」のあいだに本質的な違いはないのだ。

「獄中豪傑」の世界を引きついだのは洪命憲の方だった。1928年から連載が始まった長編『林巨正』の主人公林巨正は、何者にも束縛されない魂の持ち主である。「神様は何故おまえを白丁として生まれさせたんだろうねえ」という姉の嘆息に、巨正は「神なんているものか。(中略)たとえいたとしても、そんなもので俺の生まれ方が左右されてたまるか<sup>31)</sup>」と言い放つ。決して跪こうとしなかった両班の命を助け、名手が吹く笛の音の魅力にすら心を支配されることを拒絶する巨正の姿は、パイロンの悪魔を彷彿させる。自分を束縛する身分差別に反抗する巨正は、

バイロンの詩「海賊」の主人公コンラードのように外界から隔絶した山中に自分たちの世界を作って君臨し、世間への復讐をつづけるのである。

#### [付記]

以前、李光洙の初期文学活動を考察したさいに論者は詩「獄中豪傑」に注目し、この詩に現れた世界観は洪命憲の長編『林巨正』に痕跡をとどめていると書いたことがある(波田野：1991)(波田野：1992)。しかし、これは李光洙研究からのアプローチであったので、いつかは洪命憲の本格的な作品研究をおこない、東京留学生たちが当時おかれていた状況分析も加えてこの問題を再検討したいと考えてきた。幸い科学研究費補助研究(平成11～13年度)基盤研究(B)「朝鮮近代文学者と日本」(研究代表者：大村益夫)で洪命憲を分担して『林巨正』研究および洪命憲の東京留学時代の調査をしたので、本稿でそれを行った次第である。

#### [参考文献]

- (1) 波田野節子(1990):「李光洙の民族主義思想と進化論」,『朝鮮学報』No.136
- (2) 波田野節子(1991):「李光洙の自我—作品を通して見た李光洙の第一次留学時代の世界観—」,『朝鮮学報』No.139
- (3) 波田野節子(1992):「獄中豪傑の世界—李光洙の中学時代の読書歴と日本文学—」,『朝鮮学報』No.143
- (4) 波田野節子(2001):「洪命憲の東京留学時代」,『新潟大学言語文化研究』No.6
- (5) 波田野節子(2002):「洪命憲が東京で通った2つの学校—東洋商業学校と大成中学校—」,『1999～2001年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』

#### 注

- 1) 李光洙と洪命憲の東京留学時代に関しては、参考文献(1)(4)(5)を参照のこと。
- 2) 「春園文壇生活二十年을 機會로 한『文壇回顧』座談會」,『三千里』1934.11
- 3) 断指事件が起きたのは1907年1月5日である。当時東学の留学生60名ほどが東京の専門学校や普通学校に在学しており、うち20名ほどは李光洙と同じ大成中学校に在籍していた。学費が中断した留学生たちは「館賃は山積し食資が永絶」して苦勞したという。(『大韓留学生会学報』創刊号,p.86-88,1907.3)
- 4) 前掲書参照。李光洙の場合、退学した学年である1年生に復学して

は3年の学費給付期間内に中学を卒業することはできないはずだった。なお『大韓興学报』第9号(1910.1)の彙報には、3月で学費が切れる6月卒業予定の「断指한学生」を下賜金の利息で救済することが報じられている。

- 5) 山崎俊夫(1891～1978)は慶応大学在学中に『三田文学』や『帝国文学』に特異な作風の小説を発表した。その中には明治学院を舞台に李光洙を主人公にした短編「耶蘇降誕祭前夜」もある。山崎は大学を卒業した後は文学から離れ、忘れられた存在になっていた。埋もれていた彼の作品を再発見して世に出したのは故生田耕作だった。1986年から奢瀨都館で作品集の刊行が始まり、現在まで上中下三巻と補巻一を出して、自作年譜を含む補巻二を残すのみとなっている。拙論(波田野:1990)を執筆中に、この作品集のおかげで「耶蘇降誕祭前夜」を発見することができた。当時作品集の存在をご教示くださった三枝壽勝先生に、この場を借りて感謝を申し上げる。なお、補巻一には山崎が李光洙と洪命憲のことを回想したエッセイ「京城の空の下」と「けいべつ」も収録されている。
- 6) このとき洪命憲が引き合いに出したのは「長谷川誠世の反基督教論や加藤弘智(之)の我国体、フォイエルバッハ、ストラウス」などだったという(「대톨스토이의 인물과 작품」, 『朝鮮日報』, 1935.11.23～12.4, 林榮澤・姜玲珠編『碧初洪命憲와「林巨正」의 研究資料』, pp.83-4, 사계절사)
- 7) 「나의告白」, 『李光洙全集』第13巻, 三中堂, 1962, pp.184, 188
- 8) 同上, p.189
- 9) 『韓国開化期學術誌大韓興学报上』解題, 亜細亜文化社, 1978  
「要録本會의 歴史」, 『大韓興学报』第10号, p.54
- 10) 「나의告白」, 前掲書, p.192
- 11) Lord Macaulay(1800-59), 英国のエッセイスト・歴史家。Thomas Babington Macaulayの名前の方で有名である。三投生が読んだのは「Warren Hastings」だと思われるが、論者の調べた限り当時の日本には翻訳が出ていないので、原書を読んでいたと思われる。
- 12) Warren Hastings(1732-1818) 初代ベンガル総督として11年間の統治で英領インドの基礎を築いた。本国の下院で統治の厳酷と誅求を弾劾されたが、審理の結果免訴になった。(『岩波西洋人名辞典』1981参照)
- 13) 『大韓興学报』第8号, p.48
- 14) 同上
- 15) 11月8日(月曜)すなわち2日目の記述である。
- 16) 『朝鮮文壇』第6号, 7号, 1925
- 17) 「僕が日記を書くにあたり主眼とするのは、僕の心の中に起きた、あるい

は僕を深く感動させたさまざまな事件をもっとも確実にもっとも率直に記入することだ」(原文朝鮮語) 前掲第6号, p.50

- 18) たとえば12月22日(水曜)に「李完用が死んだ」とあるが、この日、日本に来ていた李完用が李在明に刺されている。かなりの重傷で、新聞も一時は「刺殺」という言葉を使ったほどであった。
- 19) 「金鏡」(『青春』第6号, p.121, 1915.3)。「日記」の冒頭に「釜山駅で半年間の悲劇を記録した日記を失い日記をやめてから3ヶ月になる」とある。この悲劇がバイロンを知って生じた葛藤のことではないかと推測される。すると李光洙がバイロンを知ったのは、11月7日より3ヶ月+半年前で、中学4年生の終わり頃ということになる
- 20) 第1日目である11月7日の記述。(『朝鮮文壇』第6号, 1925, p.50)
- 21) 『朝日新聞』は明治42年11月22日(火曜)5面に第一報を載せているが、事件が起きたのは21日未明。ニュースはその日のうちに広まったのだろう。
- 22) 翌日の『朝日新聞』に「白金の火事」という見出しの記事が見える。白金今坂町の民家から火が出て2戸が焼失した。
- 23) 拙論(波田野:1991)執筆のときは嘯印が何者かわからなかったため「本名不明」としておいたが、その後浅井良純氏のご協力により判明した。また布袋敏博氏からは生年月日に関するご教示をいただいた。この場を借りてお2人にお礼を申し上げます。なお『大韓興学報』8号の編集室餘言の筆者「三投生」も、内容の水準の高さや文体などから見て趙鏞殷の可能性が高いように思う。
- 24) 『大韓興学報』第4号, p.11
- 25) 『大韓興学報』第8号, p.1
- 26) 彼の「日記」には「東洋の偉人はみな奴隷だ!」という言葉や、「奴隷」という小説を書こうとしたことなどが記されている。
- 27) 李光洙は「金鏡」の中で、自分がバイロンを知って葛藤しているとき「洪君は傍観冷笑」していたと書いている。
- 28) 1908年2月と3月の『河南』に発表された。岩波書店『魯迅選集』第5巻, 補注94, 1986(改訂版1964)
- 29) 前掲書 p.91
- 30) 前掲書 p.92
- 31) 『林巨正』2「両班篇」6-14, p.183, 사계절사, 1991